

3 明倫短期大学附属歯科診療所における予防処置患者のう蝕経験の現状

○石崎 愛, 本間 和代, 渡辺 美幸, 平澤 明美, 江川 広子, 佐藤 裕子, 山田 隆文
(歯科衛生士学科)

【はじめに】

我が国において、2000年より目標達成年度を2010年に定めた21世紀国民健康づくり運動（健康日本21）が開始された。歯科保健分野4項目のなかに乳児期・学童期の歯の健康目標として3歳児のう蝕のない者の割合の増加、12歳児のう蝕数の減少が掲げられている。今後、歯科疾患実態調査や健康日本21の目標値と対比して、予防効果をみることを目的に本学学生が関わった附属歯科診療所予防処置受診者のう蝕経験（dmf・DMF）及びプラークコントロールレコード（PCR）の現状を調査したので報告する。

【対象者】

平成14年の1年間に明倫短期大学附属歯科診療所に来院し、フッ素塗布等を実施した1歳から13歳までの381名を対象とした。

【調査項目】

来院時の健診結果より、1) df・DMF者率、2) df・DMF歯率、3) dft・DMFT指数、4) プラークコントロールレコード（PCR）の4項目について求めた。

【結果および考察】

本学、1～5歳のdf者率は19.5%、6～13歳のDMF者率は36.8%で、歯科疾患実態調査と比較し、13.4%、11.4%低かった。1～5歳のdft指数は0.7本、6～13歳のDMTF指数は1.0本でいずれも実態調査より少なかった。また、PCRは演者らが目標とする20%以下の値より4.4%高く、予想と反した結果だった。さらに健康日本21との比較では3歳児のう蝕のない者の割合80%以上に対し74.1%、12歳児の一人平均う蝕数1本以下に対し1.25本であった。

以上、う蝕の現状は、実態調査より良好であるが、健康日本21目標値には到達しておらず、今後もリコールによる管理を継続していく必要がある。

4 平成15年度 生体技工専攻科における臨床技工実習の教育的効果

○丸山 満, 野村 章子, 伊藤 圭一 (歯科技工士学科),
高見 大介 (附属歯科診療所歯科技工室), 水橋 庸子 (附属歯科診療所)

現在の歯科医療体系における歯科技工士とは、技工室という室内環境での模型操作が主であり、患者情報も歯科技工指示書に限られていることから対物行為という認識が強いものとなっている。この現状を改善すべく、医療従事者としての意識付けや、コミュニケーションが円滑にはかれるような教育研修の充実が望まれている。

本学には歯科技工士学科に専攻科生体技工専攻が設置され、従来から臨床技工実習で見学実習を実施していた。

今年度より、診療術式の理解と技工物製作を両立させるために新たな教育方法を試みた。一部の臨床技工実習を患者担当制とし、診療見学は患者の同意を得て、担当医の指導の下で実施した。

上下顎全部床義歯の1症例と、上下顎局部床義歯の1症例はいずれも義歯の不適合を主訴として、着色しにくい人工歯の希望から、ポリカーボネート材料での義歯製作を治療方針とした。

全部床義歯の見学回数は診査から義歯装着まで8回、調整3回、リコール2回、局部床義歯ではそれぞれ6回、9回であり、担当学生はすべての診療術式を見学できた。昨年までは、一症例について最大4回までであった事と比較しても、見学回数は格段に増加した。そこで、専攻生が診療現場に臨むことにより、歯科医療の実際について理解を深められ、医療従事者としての自覚を促すことができた。さらに、歯科技工指示書や模型では得られない口腔内の状況を視覚や触覚で捉えられ、装着時の適合の評価と共に、機能、形態、審美についても確認することもできた。また、患者と直接コミュニケーションを取ることで、患者情報も収集できた。それらは、製作される技工物に反映することができた。

以上から、歯科技工士が臨床現場に臨む実習形式は、教育的にも良好な結果が得られることがわかった。今後は、歯科技工全般において教育的効果を検討していく予定である。